

北海道から 岩手県へ

氏名 田中 崇志

北海道小樽潮陵高等学校 → 岩手県立盛岡第一高等学校

(期間：平成25年4月1日～平成27年3月31日)

1 派遣先学校の特徴

私が派遣された盛岡第一高等学校は、創立135年（平成27年）の伝統校であり、石川啄木、宮沢賢治など著名な人材を多数輩出している岩手県随一の進学校である。岩手県特有のバンカラな気風が色濃く残り、応援活動を中心に生徒の自主的な行事運営がなされている。平成27年度より文科省からスーパーグローバルハイスクール（SGH）の認定を受け、21世紀のグローバル社会を開拓しうる人材の育成を目指している。



2 派遣先の学力向上等の取組

○難関大進学に向けた岩手県の取り組み

（1）進学支援ネットワーク

県の進学指導事業として超難関大講座が開催される。県の難関大（東大等）合格者アップを狙った事業で、県下進学校から優秀な生徒を集め、年数回予備校講師や県内教諭の講義を受講させる。県議会からのトップダウンの事業であり、盛岡一高からは80名程度の枠で参加。県全員では150名程度（1年生）。2、3年生ではさらに縮小され絞られる。2年後半からは医学部対策講座がある。また、進路セミナーとして、予備校講師を招き教員向け受験指導法の研修などがある。「進学支援ネットワーク」は進学指導ばかりではなく、県をあげて多様な進路に対応した企画事業、指定校の独自事業などがあり、充実している。

（2）東北各校との連携

東北の進学校が情報交換し、大学入試のデータやノウハウを共有し合っている。授業見学や指導方法の研修を行い、指導力を高め合う機会となっている。県同士がいい意味で競い合っている。

「北東北五校進学連絡協議会」（弘前・八戸・青森・盛岡第一・秋田）

「東北六校会」（八戸・盛岡第一・秋田・山形東・仙台第二・福島）

○盛岡一高の取り組み

（1）東大・医学部指導

2年生後半から「赤門倶楽部」というグループを発足し、東大等難関大志望者に対する東

大添削や東大訪問、東大生の出張セミナーなどへ参加させていく。添削には主に東大過去問などを用い、3年生では学年を超えて各教科の教員が添削に当たる。2週間に1回程度、1教員につき生徒数名～10数名程度の添削である。

医学部志望者に対しては「club doctor（クラブドクター）」を発足し、英語、数学、理科の添削課題や医療系新聞記事のレポート課題、病院・医学部訪問参加等をさせていく。

難関大・医学部志望者をグループ化し、志を同じくする者の相互学習によって進路意識を向上させる。

（2）理数科「課題研究」

2年から理数科クラスが1クラス編成される。「課題研究」の時間を設け、生徒がチームで自主的に課題設定し、研究、発表をする。また、理数科講演会・研修会、地学野外実習、筑波研究学園都市見学などがあり、科学的・数学的能力を高めるための実験実習が数多く設定されている。

（3）新しい学力観に基づいた授業改善

各教科、言語活動を充実させ、アクティブラーニングを積極的に活用し、自主的に問題解決に取り組ませる授業を推進しており、一高教員は新しい学力観に基づいた授業改善に積極的であった。互観授業も教科を超えて積極的になされ、受験勉強だけにとらわれず、学問の本質に出会わせるような授業を目指し研鑽していた。

特に私が勤務中はSGHアソシエイト校として（h27からはSGH指定校）、グローバルな人材育成のための研究、授業実践がなされた。（ディベート、「哲学（悪について）」「数学研究」「詩歌研究」「新聞読み比べ」等といった課題研究、インターンシップ等）

3 北海道に戻って実践したいこと

1, 2年の担任を持たせていただき、チームワークの良い学年団の先生達、生徒や保護者とより深く関わったことは大変ありがたかった。授業、評価方法、担任・分掌業務など自分の固定観念に気づかされ、相対的に考えるきっかけを得ることができた。何より、岩手県の先生方とのネットワークを築くことができ、今後も情報交換できることが大きな収穫である。

○ 授業改善

アクティブラーニングなど生徒の自主的な活動を生かす授業に新しく取り組むきっかけを得た。多様な意見を取り入れ、自ら課題設定し、解決していく力を育む新しい学力観に基づいた授業展開を研究、改善していきたい。

○ 進路意識を向上させる組織的な指導

大学や職場訪問、OB交流、グループ化、講演会などによって、本質的な学問の興味関心を拓いたり、広くグローバルな視野を持たせたりして、より高い進路意識を喚起させる組織的な指導を研究、実践していきたい。